

生物多様性への配慮が重要となってきた農薬

◆欧州連合がネオニコチノイドの屋外使用を禁止

2018年4月、欧州連合（EU）は、ネオニコチノイド系農薬3種の屋外使用禁止を決定した。ネオニコチノイド系農薬は、タバコに含まれるニコチンに似たネオニコチノイドを成分とする殺虫剤であり、7種類ある。イネやトウモロコシなどの穀類や、野菜、果物などに広く使われ、世界で最もよく使われている殺虫剤である。しかし、ミツバチの大量死の原因物質との疑いや生物多様性への影響、さらには神経発達障害などの人への影響も懸念されている。

EUは13年に、安全性が確認できるまで3種類のネオニコチノイド系農薬の使用を暫定的に制限することとしていた。これに対して、ネオニコチノイド系農薬メーカー3社は、EUによる13年の使用制限を不服として、欧州司法裁判所に規制の撤回を求める訴えを起こしていた。これに対して18年5月、訴えが却下された。対策は妥当との判断である。

一方、欧州食品安全機関が安全性を検討した結果、18年2月にネオニコチノイド系農薬がミツバチの活動や生存に対するリスク要因であることが確認されたと発表した。これを受けて、4月にこの3種類の農薬を屋外で使用することを禁止することが決まった。ただし環境汚染のリスクが少ない温室内での使用は例外的に認められる。

◆新たな殺虫剤の登録も続いている

18年6月、BASFは農業用殺虫剤インスカリスが世界の主要国で登録されたと発表した。オーストラリアとインドで登録が完了し、米国、カナダなどでも登録される見通しであるという。インスカリスは、日本のMeiji Seika ファルマ（以下Meiji）とノーベル賞受賞者の大村北里大学特別荣誉教授が開発したもので、MeijiとBASFが共同開発したものである。アブラムシやカイガラムシなどの防除に適している。インスカリスは、自然の発酵産物をもとに見出された有効成分で、ハチなどの花粉媒介者などの益虫への影響を最小限に抑えた殺虫剤である。

農薬も効果だけでなく生物多様性への影響が重視されてきている。【松村晴雄】